

国際ユニバーサルデザイン会議2002を 終えて

International Conference for Universal Design in Japan 2002

あらまし

2002年11月30日から12月4日まで、「ユニバーサルデザイン」をテーマとする日本初の国際会議として「国際ユニバーサルデザイン会議2002」が横浜で開催された。

富士通はお客様視点のものづくりとユーザビリティ向上活動の一環として本会議の趣旨に賛同し、会議の立上げ・準備の段階から企画運営スタッフとして組織委員会、実行委員会に参画した。また、特別協賛企業として論文発表、ランチョンセミナー、展示会に参加した。

本稿では、本会議の概要と開催結果、および富士通の取組みについて、活況を呈した会場の様子を交えて紹介し、IT企業にとっての本会議の意義や今後のビジネスへの影響を考える。

Abstract

The International Conference for Universal Design in Japan 2002 took place in Yokohama, Japan, from November 30 to December 4, 2002, the first international conference to be held in Japan on the topic of universal design. Recognizing its importance, Fujitsu participated in the conference organizing and executive committees and was thus involved in the planning and management during the initial and preparatory stages. Fujitsu is committed to designing products from the customer's viewpoint and improving product usability. As a special sponsor, Fujitsu also delivered presentations on its research, held a luncheon seminar and exhibited products. This paper summarizes the conference and its results, describes how Fujitsu participated and the lively atmosphere of the conference and the exhibition site, and discusses the significance of the conference for companies in the IT industry and its effect on future business.



髙谷邦夫（つたたに くにお）
総合デザインセンターデザイン企画
部 所属
現在、ユニバーサルデザイン、エコ
デザインの社内浸透、ビジネスへの
活用推進などの業務に従事。

まえがき

「国際ユニバーサルデザイン会議2002」⁽¹⁾（以下、本会議）が2002年11月30日から12月4日まで5日間、パシフィコ横浜で開催された。本会議はユニバーサルデザイン（以下、UD）をテーマとする国際会議としては日本初の開催となり、米国のUD推進団体であるアダプティブ・エンバイロメンツセンターが1998年と2000年の2回にわたり米国で開催した国際会議に続くものである。

本会議は、前出の米国の国際会議に参加した多くのデザイナーの中の5名が発起人となり、寛仁親王殿下のお声かけによりスタートしたものである。組織委員会は殿下を総裁とし、富士通の山本名誉会長を会長として、企業からは松下電器産業、日立、リコー、JR東日本の各社の代表が、デザイン関係からは国際デザイン交流協会、日本産業デザイン振興会、かながわデザイン機構の3団体の代表者がそれぞれ参加し構成された。実行委員会は発起人の一人である独立行政法人建築研究所の古瀬首席研究員を委員長として、UD推進に取り組んでこられた方を中心に、協賛企業からのメンバも加わり構成された。富士通からは加藤総合デザインセンター長が参加し、そのサブとして著者もメンバに加わった。また、多くの中央省庁・自治体やデザイン・UD関連団体、大学・教育機関の後援、協力も得て、名実ともに産官学を挙げたイベントとなった。

会議登録者が日本を含めた20か国から693名（海外から87名）、公開シンポジウム参加者が約750名、併設展示会への来場者の延べ数が約3,200名と、国際会議としてほぼ満足できる結果と言える。今回の会議の特徴として協賛企業29社、賛助企業4社と民間企業の参加が非常に多かったことが挙げられる。

本稿では、その概要と富士通の本会議への取り組み内容について、実行委員としての準備・運営サイドからの視点と、協賛企業として参加者の立場から今後のUDのビジネスへの適用における課題などを含めてご紹介する。

本会議の概要

本会議プログラムとしては、初日の開会式、公開シンポジウムに続き、12月1日から4日間にわたり全体会議が7セッション、合計100件の論文発表を

中心とした分科会が32セッション、特別協賛企業によるランチョンセミナーが5セッション、さらに協賛企業24社、デザイン関連の2団体による併設展示会が開催された。また、最終日にはフィールドツアーとしてお台場地区と横浜港・大棧橋の施設見学会が実施された。閉会式では国際ユニバーサルデザイン宣言が発表され、5日間のイベントの幕を閉じた。

本会議の主要なイベントの状況を以下に報告する。

● 公開シンポジウム

公開シンポジウムではヴァレリー・フレッチャー、ロジャー・コールマン両氏による基調講演とパネルディスカッションが開催された。

基調講演では、ユニバーサルデザインの動向と将来展望についてアダプティブ・エンバイロメンツセンター所長のヴァレリー・フレッチャー氏が米国の状況を、英国王立芸術大学院教授でヘレン・ハムリン研究所長のロジャー・コールマン氏がヨーロッパでの状況を、それぞれ紹介された。参加者は会議登録者だけでなく一般からの申込者も加わり、準備した席がほぼ満席となる盛況ぶりであった。車いすでの参加者や、介添者と同伴されている方の姿も目立った。国際会議のため、基本的に英語が使用されていたが、日英の同時通訳のほか、キャプション、補聴システム、手話通訳など、視聴覚障害を持つ方への配慮がなされていた（詳しくは後述）。

● 全体会議

UDを専門とする研究者だけでなく、建築、交通、デザイン、企業、自治体、消費者代表など幅広い分野で活躍されている方々により、全体会議として7セッションが開催され「人間の^{ひと}のために、一人一人の^{ひとりひとり}のために」という全体テーマをそれぞれの分野から掘り下げ、取組み事例の紹介や提案など活発な議論が展開された。

● 分科会

最終的に100件の論文が32のセッションに分かれて発表された。学術的な研究成果の発表だけでなく、製品開発や取組みの事例など具体的な実践の結果も多数含まれており、大変充実した内容であった。富士通からもWebアクセシビリティと、ATMをはじめとする製品のUDに関する2テーマの発表を行った。

富士通の本会議への取組み

富士通はお客様視点のものづくりと、ユーザビリティ向上活動の一環として、本会議の趣旨に賛同し、特別協賛企業として前述の論文発表のほか、ランチョンセミナー、併設展示会に参加した。ここではこれらのイベントについて富士通の本会議でのUD活動を中心に報告する。

● ランチョンセミナー

昼食をとりながら聴くランチョンセミナーが、特別協賛企業5社により開催された。各企業のUDに対するコンセプトや取組みの紹介が中心であった。富士通は、ユーザビリティグループを中心に若手メンバーで企画から運営まで実施した。具体的には、気軽な雰囲気でのUDに対する取組みをPRしたいという意図から、クイズ形式の企画を実施した。イギリスで制作され、50か国以上で放映されている世界的に人気の高いクイズ番組をもじってUDに関連する知識をクイズで競うイベントを行った。クイズの内容はUDの一般的な問題もあるが、ATMや携帯電話など富士通のUD製品に関する問題を随所に織り込み、その解説を通して富士通のUDに対する取組みをPRした。レクチャー形式の硬いセミナーがほとんどという中において、UDの啓発と自社PRをエンターテインメント仕立てで展開したこの企画は、参加者はもとより、まわりの方々からも高い評価をいただいた。

● 併設展示会

協賛企業、協力団体を併せて26のブースでUD製品やコンセプト、取組みの紹介などを中心に展示を行った。富士通は特別協賛企業ということで、入口に一番近い場所にブースをいただき、関連部門やグループ会社のご協力も得て、インターネット関連とATM関連の情報端末という大きく二つのコーナーで展示デモを行った(図-1)。プラズマディスプレイによる画面の拡大表示や車いすでのアクセスに考慮した展示台など、展示方法においてもUD的な配慮を行った。具体的な展示内容は以下のとおりである。

- (1) 富士通グループユニバーサルデザインコンセプト^②
- (2) 富士通ウェブ・アクセシビリティ指針^③
- (3) WebInspector : Webアクセシビリティ診断ツール



図-1 富士通ブース
Fig.1-Fujitsu booth.

- (4) らくらくメール : 障害児向け電子メールソフト
- (5) Vモードシステム : 音声によるインターネットサービス
- (6) 音しるべ (仮称) : 音声によるGPSサービス
- (7) NTTドコモ携帯電話 らくらくホンII/II S
- (8) 各種公共サービス端末

- ・FACT-V : アクセシビリティに配慮したATM
- ・FACT-V開発ストーリー
- ・Model 8010 : ADA法に準拠した海外向けATM
- ・amabile (アマービレ) : 診療費精算端末
- ・Conbrio J : 自治体向け情報端末

● 情報保障への配慮

今回の会議の大きな特長として情報保障への配慮が挙げられる。国際会議のため、基本的に英語が使用されていたが、全体会議においては音声レシーバによる日英の同時通訳のほか、字幕スクリーンによるキャプション、磁気ループによる補聴システム、手話通訳など、言語の問題だけでなく、視聴覚障害を持つ方への配慮がなされていた(図-2)。とくにキャプションについては富士通も関わり産学協同で開発した音声認識によるシステムが使用されたが、サービスを提供する会社とシステム環境が北海道にあるため、同時通訳者など運営スタッフのコストも検討した結果、ISDN回線で会場の音声を送り、文字データを返送するというネットワークをフルに活用したシステムでサービスが提供された。全体としてはレベルの高いサービスが提供されていたと言えるが、英語の手話サービスや和文テキストなど、人材、スケジュール、予算の関係などから最終的に提供できなかったサービスもあり、情報保障



図-2 情報保障サービス
Fig.2-Information services for disabilities.

サービスは日本で開催される国際会議として今後検討されるべき課題と言える。

なお、同時通訳の質的レベルも非常に高く、欧米のUD専門家からも高い評価をいただいた。

国際ユニバーサルデザイン宣言

最終日の閉会式においては今回の会議からのメッセージとして「国際ユニバーサルデザイン宣言」が発表された。UDをつくり手だけの問題として捉えず、むしろ使い手を中心とした考え方として、社会のすべての面に適用されるべきであること、そしてそのための社会の仕組みづくりをしていこうとする決意を宣言したもので、今後のUD推進の考え方の指針となるものである。以下に全文を引用する。

国際ユニバーサルデザイン宣言 2002年12月4日

私たちはここ横浜に集い、「^{ひと}人間のために一人一人のために」をテーマに議論を重ねてきました。

私たちの社会は発展、高度化していく中で効率と引き換えに、知らず知らずのうちに使い手の多様性を軽視してきたのかも知れません。ここで、あらためて使い手と作り手の関係を再構築することが必要です。私たちは一人一人の人間性を尊重した社会環境づくりをユニバーサルデザインと呼び、それを強力に推進していきたいと考えます。

まず、使い手中心のしくみを作ることを急がなければなりません。これは単にものづくりにとどまらず、社会のすべての面に適用されるべきだと考えま

す。私たちはユニバーサルデザインが即座に全ての問題を解決できる魔法の杖だとは考えていません。しかし、時間をかけて目標に向かっていくことは可能だと思っています。そのためには、使い手が積極的に声を出すこと、そしてそれをきちんと受けとめ、応える社会のしくみが必要です。

文化・習慣の違いを認め合いながら、真のグローバルバージョンを模索していきます。ユニバーサルデザインの考え方が、限りある地球資源を尊重し、持続可能な社会を築く礎とならなくてはなりません。

私たちは前進します。人間がその個性を發揮しながら、いつまでも生き生きと暮らしていける社会を目指します。目標は、すべての人の参画と自立の実現です。

世界からここに集まった参加者とその理念を共有し、この会議の成果としてここに宣言いたします。

む す び

本稿では、富士通が特別協賛企業というかたちで係った国際ユニバーサルデザイン会議2002について、会議の意義や富士通の積極的な取組みを紹介した。米国での2回の国際会議と比較し、多くの企業の参加と協力が得られたことが今回の会議の特徴でもあり、成功の大きなかぎであったと言える。ユニバーサルデザインは超高齢社会となる日本においては、もはや啓発という段階ではなく、実際の製品として提供していかなければならない段階にきている。しかしそのためには、まだ多数の課題を抱えており、とくにITの分野においては技術的な問題だけでなく、法律・制度の見直しやユーザ参加の仕組みづくりの問題など、産官学のコラボレーションや業界の壁を越えた横断的な取組みが急務である。富士通においても全社的な取組みを展開していくには、情報を一元化・共有化して活用し、製品開発やビジネスに生かしていくための組織や仕組みを早急に検討する必要がある。

ユニバーサルデザインはIT産業をリードする企業としての社会的責任であるばかりでなく、実際のビジネスの現場においても最重要テーマの一つである。e-Japan関連ビジネスやシニアの使用を考慮したパソコン、携帯電話の開発などはニーズが高まっており早急な対応を迫られている。今回の会議を契

機として、さらにその認識を深め、具体的な製品開発やビジネスの場で実践し、具体的な成果として出していきたい。

参考文献

- (1) 国際ユニバーサルデザイン会議2002公式サイト.
<http://www.ud2002.org/jp/>

- (2) 富士通のアクセシビリティに対する考え方.
<http://jp.fujitsu.com/accessibility/>
- (3) 富士通ウェブ・アクセシビリティ指針.
<http://jp.fujitsu.com/webaccessibility/>

